

高倉の神かくし

奄美市立屋仁小学校 六年 宗清 風紗

太陽が海を赤く染め始めた頃、父たちの指笛や太鼓の音が集落中に鳴りひびき出した。母たちは八月おどりの準備で右往左往している。

「スマレ、お友達とあっちで遊んでなさい。」

母にそう言われ、友達三人と一緒にかくれんぼをすることにした。私は、村で一番大きな高倉にかくれることにした。中に入ると、真っ暗でひんやりとしていた。ここなら絶対に見つからない。そう考えてしばらくじっとしていた。十分くらいつと、セミの声も友達の声も聞こえなくなり、静けさに押しつぶされそうになった。私は、こわくなり外に出た。

「え、ここはどこ。みんなどこに行ったの。」

目の前には、広い広い草原が広がっていた。よく見ると、黒い点がそこら中で動いている。その一つが後ろから足にぶつかってきた。

「うわあ。何なの。」

思わずさけんで足下を見ると、そこには黒いウサギがいた。長い後ろ足に、長い耳、すきとおるような青い目のウサギだ。すると、その黒いウサギが話しかけてきた。

「ごめんごめん。けがはないかい。」

「ええ。あなたたちはなんていうウサギなの。」

「ぼくたちは、アマミノクロウサギさ。」

ウサギと話せたのもおどろきだが、その名前にもおどろいた。確かに黒いけれど、アマミノクロウサギとは特ちようが全くちがう。

「ぼくは、シロタ。手の先が白いだろう。」

シロタは、じまんに手をふってみせた。

「私は、スマレ。ねえ、ここはどこなの。」

とたずねると、シロタは、

「ここは奄美大島さ。それより、君はひまそうだね。一緒に八月おどりに行こうよ。」

と言って、足をひっぱってきた。私は何が何だかわからないままシロタについていった。

しばらく歩くと、シロタの仲間が五十匹くらい集まっていた。辺りがうす暗くなり、

「ピシーピシーピシー。」

と黒ウサギたちの鳴き声が草原にひびきわたり始めた。おどりの輪の中心には、シイの実やツルソバなどがゲツトウの皿にたくさん盛られている。おどったり、食べたりしている内に少し気持ちが落ち着いた。にぎやかな時間はあつという間にすぎ、ねる時刻になった。子ウサギたちは、母ウサギと一緒にふわふわの草のベットでねて

いる。

「子どもを穴にうめないのかしら。暮らし方も姿もアマミノクロウサギには似てないわ。」

そんなことを考えながら、いつの間にか眠ってしまった。

みんなが寝静まったところ、しげみから金色に光る長いものが、音もなくするすると出て来た。ハブだ。その時、誰かがさげんだ。

「みんな、ハブだ。にげろっ。」

黒ウサギたちは、さげび声をあげながらいっせいに逃げ出した。私は、シロタに手を引かれてしげみにかくれた。真つ暗なしげみの中で息を殺し、朝になるまでふるえてすごした。何時間たったのだろう。やっと朝日がさしてきた。そうつと外に出て行くと、仲間たちも姿を現し始めた。すると群れのリーダーが、

「実は、大陸から引つ越してきて以来、毎晩ハブが子ウサギをおそいにくるのじゃ。」

となみだをながして話し始めた。その話を聞いて、初めて自分がどこにいるのか分かった。

「大陸からきたばかり……つまり百五十万年くらい前ってことだ。私、タイムスリップしたんだわ。」

なぞがとけた私は、黒ウサギたちにハブから身を守る方法を教えることにした。

「私がいた時代では、アマミノクロウサギは、穴をほつて子どもをうめているわ。そのために、耳は短くてつめががんじょうなの。」

「なるほど、穴をほれば子どもは助かる。」

早速山へ向かい、穴をほる計画を立て始めた。

「入り口はせまくして、土でかくそう。」

「穴は二メートルくらいほるといいみたい。」

黒ウサギたちは慣れない手つきで穴を掘り始めた。二日後、森の中に穴をほった黒ウサギたちは、ハブからおそわれることがなくなった。

そんなある日、

「スマイレー、どこにいるの。」

なつかしい友達の声が森の奥から聞こえてきた。声の方へ走っていくと、そこには見覚えのある高倉があった。私は大急ぎで中へ入った。すると、真つ暗でひんやりとした空気につつまれ、気を失ってしまった。

目を覚ますと、友達が心配そうな顔で私をのぞきこんでいた。

「全くスマイレったら。昼寝してる場合じゃないでしょ。」

八月おどりに行こう。」

そう言われ、ぼんやりした顔でおどりに参加した。

「夢だったのかなあ。」

悩みながら帰っていると、目の前に手の先が白いアマ

ミノクロウサギが現れた。

「シロタだっ。」

私は心の中でさげんだ。すると、そのアミノクロウサギは、じまんに手をふってみせた。

「スミレありがとう。おかげで一五〇万年たった今でもぼくたちは命をつないでいるよ。」
と言っているような気がした。